

## 学習チューター活動の支援方法に関する検討

- 大学内におけるセンター型支援・ネットワーク型支援の在り方 -

眞榮城和美

## The Support system for study-tutor activities

Kazumi MAESHIRO

### 1. 問題と目的

近年、児童・生徒支援を目的とした学校支援ボランティア活動や特別支援教育支援活動が充実してきている中（たとえば黒沢・日高，2005，眞榮城・西，2008 など），長野市では「学習チューター」という名称を用い，学生（信州大学・清泉女学院大学の学生）が市内の公立小中学校において児童・生徒の発達・学習支援を行っている。長野市での学習チューター活動は平成 15 年度より「放課後学習チューター」（文部科学省事業）として開始されており，放課後のみならず小中学校の授業時間内での支援活動を必要としている現場の実態に合わせ，平成 19 年度以降は「放課後」をとった現在の名称「学習チューター」として活躍している。なお，本活動は平成 15 年度から平成 17 年度まで文部科学省事業として展開し，平成 18 年度・平成 19 年度の 2 年間は，信州大学が委託を受けていた「新教育システム開発プログラム」により有償ボランティアとして活動することが可能であった。しかしながら事業終了にともない，平成 20 年度以降は完全無償のボランティア活動として展開している。学習チューターを受け入れている小中学校の先生方からは「一人でも二人でもよいので学生ボランティアを募りたい」（長野市教育委員会，2010）との声があり，平成 20 年度以降も長野市教育委員会のコーディネートにより活動が継続している。

清泉女学院大学の学生は平成 18 年度より本活動に参加し，これまでに学習チューターとして活躍している学生は約 70 名となっている。また，長野市以外での学習チューター活動を希望する学生の働きかけにより，近隣他市（上田市や千曲市など）においても同様の活動が広がりを見せている。学習チューター活動を行っている学生たちを対象とした調査（眞榮城，西，2008）では，本活動に対する感想として「子どもと遊ぶことができ，学校の様子もうかがうことができるよい機会になった」「とても勉強になるので，チューターがもっと増えるとよいと思う」「自分自身の成長につながった」などの肯定的意見が多く報告されている。また，有償での学習チューター活動を行っていた学生に対して「無償でのボランティアであっても活動したいと思うか」という問いかけをしたところ，約 8 割の学生が活動の意欲を示しており（ややあてはまると回答した者 42.9%，あてはまると回答した者 39.3%），活動の内容に魅力を感じていることが伺える。その一方で，「学習チューターが居ることによって子どもたちが授業に集中することの邪魔をしてしまっていないか」や「学習チューターが居る必要があるのか不安に感じたこともあった」という活動に対する不安の声も聞かれている。そこで本学では，平成 19 年度より大学授業内にて学習チューターなど子どもたちの発達や学習の支援ボランティアを行っている学生をサポートする授業を設け，大学生たちが安心して児童・生徒支援活動を行うことが可能な環境を提供している。学習チューター学生を支援する授業では，多くの実習関連授業と同様，事前事後指導を行うとともに，活動中の不安軽減や活動の充実化を目指した「活動中支援」に重点を置き，グループ・スーパーヴィジョンを実施している（付録 1 参照）。この授業を開始してから 4 年が経過し，今後の学習チューター学生に対する支援を見直すためにも学生側のニー

ズを把握しなおす時期であると考えた。また、学生たちは学習チューター活動以外にも多くの学外活動を行っており、学生の社会人としての資質向上を目指す（作田，2007）ためにも、ボランティア学生に対する大学側の支援体制について改めて検討する必要があるものと考えている。

地域における臨床心理学的活動のあり方について検討した下川(2002)は、地域における心理臨床的支援をセンター型支援とネットワーク型支援の2つのタイプに分けて捉えている。センター型支援とは、活動の拠点（センター）へ支援を必要とするものが赴き、その支援を活用する方法である。学習チューター支援活動に置き換えると、ボランティアオフィスや学習チューター担当教員、学習チューター支援授業を活用する方法はセンター型支援としてとらえることができよう。一方、ネットワーク型支援は個人と個人、グループとグループのつながり（ネットワーク）を活かした支援と定義でき、学生同士のつながりや活動先とのつながり、地域とのつながりなどを活かした支援体制としてとらえることができる。よりよい地域支援活動を行うためには、センター型支援とネットワーク型支援の両方が不可欠（佐藤，2006）であることから、この視点を大学内の学習チューター支援体制を検討する際の枠組みとして取り入れてみたいと考えた。そこで、本論文では、学習チューター活動を中心として、地域で活動する学生ボランティアに対する大学側の支援体制の在り方について、センター型支援とネットワーク型支援の視点から検討する。

## 2. 方法

**調査対象者：**平成22年度に学習チューター活動に登録した清泉女学院大学に所属する女子大学生13名を対象とし、活動登録情報について確認した。また、学習チューター支援授業に対する調査は、秋学期（後期）に学習チューター支援授業を履修していた6名（2年生から4年生）を対象とした。秋学期の学習チューター支援授業履修者の平均活動歴は7か月（2か月～1年6か月）であった。

**調査時期および調査方法：**調査時期は2010年4月（活動登録情報）および2010年12月であり、学習チューター活動など子どもの発達や学習支援を行っている学生の支援を目的としている授業（発達・学校支援実習）内で自己記入式質問用紙を配布回収した。

**調査内容：**調査内容は次の通りである。

<フェイスシート>

- 学年・学習チューター歴
- 学習チューター活動先（小学校・中学校）・学年
- 活動頻度（週〇回，1回の平均活動時間〇〇時間）

<自由記述項目>

- 学習チューター支援授業を履修してよかったと思う点
- 学習チューター支援授業の改善が必要だと思う点
- 学習チューター活動を継続する上で大学側に臨むこと
- 学習チューター活動に対する意見・感想

## 3. 結果と考察

### [1]学習チューター活動先について

今年度、本学にて学習チューター活動に登録した学生は13名であったが、複数校での活動を希望した学生や同一校内で複数の学年を担当した学生が居たため、活動先一覧での報告件数の延べ人数は17名となっている（表1参照）。本年度は小学校での活動を中心としている学生が多かったが、多くの学生が「小学校と中学校の両方で活動してみたい」という希望を持っていることが学習チューター登録時の調査から明ら

かになっている。しかしながら実態としては小学校で活動している学生が多かった。学習チューター活動が本格始動するまでには、学生のニーズと受け入れ校のニーズのマッチングを行うため、活動時間帯や活動希望領域での調整がうまくいかなかったためとも考えられる。中学での学習チューター活動を希望しながらも、「中学生に勉強を教えることに不安がある」という学生も少なくない。中学校での学習チューター活動は、学習支援の他にも、相談室支援、中間教室支援、夜間中学支援と多岐に渡っている。このような受け入れ先のニーズを学生たちにも広く周知していく必要があるだろう。また、本学には中高教員一種免許状[英語]取得を目指す学生も在籍していることから、現場実習の一環として学習チューター活動に参加してみることを促していきたいと考えている。

表 1 活動先一覧

配属校種	学年	人数
小学校	1 年生	1 名
	2 年生	4 名
	3 年生	2 名
	4 年生	2 名
	5 年生	1 名
	6 年生	1 名
	特別支援教室	2 名
中学校	相談室	3 名
	校内中間教室	1 名
計		17 名

## [2]活動頻度について

活動頻度については、ほとんどの学生が週に 1 回の活動であり、朝から給食の時間をはさんで午後の授業終了時まで参加しているケースが全体の半数であった（表 2 参照）。児童・生徒と共に給食の時間や掃除の時間を過ごすことは、授業時間以外の子どもたちの様子や学校の様子を学ぶよい機会となっていたようである。週に 2 回活動できる学生は半日を学習チューター活動時間とし、あとの半日を大学の授業の時間として活用していた。学習チューター学生は、それぞれの生活ペースに合わせて活動している様子がうかがえるとともに、1 回の活動時間ができるだけ長くとれるように工夫している様子がみられた。

表 2 活動頻度一覧

活動頻度	1 回の活動時間	
週 1 回	4 時間	1 名
週 1 回	7 時間	3 名
週 2 回	3 時間	2 名

## [3] 学習チューター支援授業を履修してよかったと思う点

本学での学習チューター支援授業は春学期に 1 コマ、秋学期に 1 コマ設定されている。学習チューター支援授業を履修した学生に対し、「履修してよかった点」について自由記述を求めたところ、次の 3 つの領域についてのコメントが多く寄せられた（表 3 参照）。①活動に必要な知識の習得。②情報を共有する機会の獲得。③ケースへの対応力の向上。

具体的には、発達障害に対する知識の習得や活動の事前指導（活動時の注意など）の情報を得ることで、安心して活動することができたと報告する記述が数多く認められた。

情報の共有については、守秘義務を順守し（活動先の具体的な名称や個人名を記載しない。個人が特定できるような情報を記載しない）、学習チューター活動を行う上で困っていることや不安に感じていることを報告し、「みなさんに相談したいこと」というコーナーを設けることで、授業に参加している学生たちが発表者の活動を支援するグループ・スーパーヴィジョンの形式をとった。その結果、自分の活動を報告する過程で自分自身の活動姿勢を振り返る機会を得ることができ、また、自分の報告に対して他の学生からのフィードバックを受けることによりその後の活動をよりよくするためのアイデアを得ることができていた。

情報を共有する機会を得ることにより、自分が報告する立場として授業に参加するだけではなく、他の学生を支援する（支援アイデアを提供する）側として授業に参加し、ケースへの対応能力を深めていたことも、「ケース対応力の向上」に関する記述から読み取ることが可能である（表3参照）。春学期は履修者が比較的多かったことや学外配信授業（e-Learning 授業）となっていたことから、多くの学生の意見が聞けることや他大学の学生の情報を得ることができるというメリットがあり、また、授業や発表者に対するコメントをフォーラム上で確認することができるという新しい試みがうまく活用されていた。学生たちはメールやブログでのやり取りに慣れていると同時に、自分の活動報告に対してより多くの人間からのフィードバックがあることを期待している様子がうかがえた。今後も e-Learning のメリットを生かした活動支援（掲示板上でコメントのやり取りをするなど）を継続していきたいと考えている。

表3 学習チューター支援授業を履修してよかった点一覧

分類	具体的記述
活動に必要な知識の習得	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発達障害の資料が役立った。</li> <li>・活動を行う上で知っておくべきことについて授業を通して知ることができた。</li> </ul>
情報共有	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の活動を報告することで他のチューターと情報共有ができた。</li> <li>・同じ活動をしている人の活動内容や考えを聞くことで、自分の活動の参考にすることができ、刺激にもなった。</li> <li>・学習チューター担当教員との情報共有が可能になり、心強かった。</li> </ul>
ケース対応力の向上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どのようにしたらよりよい活動になるのかを随時他の学生から意見をもらうことが参考になった。</li> <li>・ケース検討ができ、一つの課題が多面的にみられる点がよかった。</li> <li>・自分が活動の中で困っていることについて報告することで、自分とは違った考えを沢山聞くことができた。</li> <li>・“今”抱えている悩みや不安を他の学生や先生に聞いてもらいアドバイス等をもらえたのがとてもよかった。</li> <li>・相談や意見交換がし易かった。</li> </ul>

#### [4]学習チューター支援授業の改善が必要だと思う点

学習チューター支援授業の改善点については、次の2点にまとめることができた(表4参照)。

①授業単位取得可能なシステムの構築。②グループ・スーパーヴィジョンの改善。

①については、現在でも学外活動Ⅰ(ボランティア活動)として単位申請が可能であるが、単位取得条件(90時間の活動。本学在学中の活動。担当教員による事前・事後の指導)や、手続き(履修希望者は各自個別に担当教員を訪ね事前指導を受ける。事後にレポート提出。学期末に担当教員との対話を通してふり返りをする)について周知徹底していく必要があるだろう。また、学外活動Ⅰとしての単位認定システムを知っていたとしても、「履修している半期の授業内で実習活動(学習チューター活動など)を行い、授業内での振り返りの時間を持ちたい」という学生たちの希望に応じることが可能なシステムの構築を目指すことも求められている。この点については、ボランティア活動先と授業履修学生とのニーズの摺合せが不可欠であると同時に、実習先と大学との交通手段の確保や往復の所要時間などを考慮したカリキュラム構成が必要となる。また、受け入れ先としても短時間の活動よりはできるだけ長時間、継続的に活動してもらいたいという希望を持っている場合が多いことから、相互に益のある活動として発展していくためにはさまざまな課題が残されていると言えよう。

グループ・スーパーヴィジョンのあり方に対する改善案については、多くの学生が発表前には「あまり話すことが無いかも」と言いながら、実際に報告を始めると他の学生からの質問に答える時間やレジュメに記載した以外の自分の考えを述べる時間などを必要とするケースが多くみられ、このような状況が「もっと一人の発表に時間をかけて欲しい」という希望につながったものと考えられる。今後は、これらの声を反映させた形式でのグループ・スーパーヴィジョンに取り組んでいきたい。

専門知識に関する資料提供については、他の授業とも連携を取りながら学生のニーズに答えていけるように工夫する予定である。

表4 学習チューター支援授業の改善希望一覧

分類	具体的記述
授業単位取得可能なシステムの構築	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業そのものが学習チューター活動の時間になるようにする</li> <li>・授業時間中に学習チューター活動を実施し、実施後に授業での振り返りを行う。</li> <li>・学外に出て実習を行いたい。</li> </ul>
グループ・スーパーヴィジョンの改善	<ul style="list-style-type: none"> <li>・履修者が多いと一人が発表する時間が短くなってしまうので、一人ひとりの報告に耳を傾けて聴けるようにしてほしい。</li> <li>・専門家(教員)の意見を聴く時間を増やしてほしい。</li> <li>・ケース報告内容に関連のある資料(たとえば発達障害や精神疾患に関する資料)を配布してほしい。</li> </ul>

#### [5] 学習チューター活動を継続する上で大学側に臨むこと

学習チューター活動を継続する上で大学側に臨むことは、①活動費援助、②情報提供、③情報共有の場の提供、の3点に分類することができた(表5参照)。

活動費援助については、現在、無給での活動であることから、可能な限り経済的支援の方法を模索する必要があるだろう。本学では、ボランティア保険の登録料を負担していることや、一部の交通費を支援す



るシステムが存在するなど、部分的にはあるが活動費援助を行っている。この点を学生に伝えながらも、学生のニーズに応じることが可能な新しいシステムを取り入れる可能性を検討していきたいと考えている。

情報提供については、学習チューター支援授業の充実化と同時に、学習チューター支援授業以外にも活動に関連性の高い授業の履修を勧めるなど、学生自身が体験を大学の授業と結び付けて理解を深めることができるように働きかけていく必要があるだろう。

情報共有場面の提供については、学習チューター支援授業をグループ・スーパーヴィジョンの場として位置づけ、活動を行っている学生同士の情報共有の場として活用してもらうことを目的としていたが、学生たちにとっては「かしこまる場面」と映っていた感がある。「月に1回程度で構わないので、学習チューター同士で情報を共有したり、悩みを話せる場があればいいと思う。」「かしこまらずに気軽に参加できて話せるような場があれば、自分の活動についてさらによい形で臨めると思った。」という学生の声を大切にし、月に1回程度のペースで、学生たちの都合のよい時間帯に「学習チューターのつどい」などの時間を設定していきたいと考えている。また、現在、学習チューター活動を行っている学生たちの平均活動歴は7か月と短いものであるが、受け入れ先小中学校からは「できるだけ継続してかかわってもらえると助かる」という希望が多く挙げられている。1年半以上学習チューター活動を継続して活動してきた学生からは、「関わっている生徒さんの成長を見ることができてうれしい」「自分の活動が少しは学校の役に立っているのかなと感じられる」という報告もあり、継続的な活動は受け入れ先にとっても、活動を行っている学生にとっても大きなメリットがあるものと捉えている。学生たちの活動意欲を継続するためにも「学習チューター」同士の横のつながりや縦のつながりが形成できる場を提供していく必要があるだろう。

表5 大学側への支援希望 一覧

分類	具体的記述
活動費援助	<ul style="list-style-type: none"> <li>・もし可能であれば給食費のサポートをしていただけるとありがたい。</li> <li>・交通費の援助はあると聞いているが、申請の手続き方法がいまいちわかっていない。もう少し活用しやすくしてもらえると助かる。</li> </ul>
情報提供	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あらゆるケースに対処する支援方法についての情報提供。</li> <li>・発達障害の基礎知識、支援方法についての理解を継続して深めたい。</li> <li>・学習チューターとして、何をしたらいいのか、どこまでやっていいのかわからず不安に思うことがあるので、そういったことについて情報を提供してもらいたい。</li> </ul>
情報共有場面の提供	<ul style="list-style-type: none"> <li>・月に1回程度で構わないので、学習チューター同士で情報を共有したり、悩みを話せる場があればいいと思う。</li> <li>・かしこまらずに気軽に参加できて話せるような場があれば、自分の活動についてさらによい形で臨めると思った。</li> </ul>

#### [6] 学習チューター活動に対する意見・感想

学習チューター活動に対する意見・感想については、次の4点に分類することができた（表6参照）。①活動意欲の向上、②体験学習の重要性、③広報活動の必要性、④活動拡大の必要性。

「もっと早く活動をはじめていればよかった」や「来年も活動を継続したい」という記述からは、学習チューター活動によって得られたものが大きかったと実感しているため、「もっと長く、継続的に活動したい」という学生たちの意欲が現れているものと考えられる。同時に、「もっと早く活動を開始すればよかった」という声の背後には、「こういう活動についてもっと早く知らせて欲しかった」という学習チューターに関する広報活動の活性化を促すものとしてとらえることも可能であろう。学生たちが普段から学習チューター活動について触れる機会を増やす方法として、「校内に写真や活動報告を貼る」などの具体的な案も挙げられている。これらの学生たちの声を参考にし、今後はこれまで以上に広報活動を活発にしていけるとよいのではないかと考えている。また、学習チューター活動を行っている学生側から「体験学習の重要性」について語られていることは、本活動を通して学生たちが成長している証としてとらえることができる点であると思われる。「心理を学ぶ場にいる学生にとっての実体験は講義を受ける時も重なる部分が多いと感じられる。」「やりがいのある活動だと思う。活動している学生がいきいきとしている。」というコメントに表現されているように、学生たちが大学で学んだことを地域に還元し、また地域で学んだことを大学に還元できるような学習の場として本活動が展開していくことを望んでいる。例年、数ケースではあるが、学習チューター学生が非常にいきいきと活動していることから、学習チューター学生の友人が「〇〇さんと同じ活動をしてみたい」という希望を抱き、他市での活動を開始するなど、学習チューター事業が拡大してきている様子もみられている。これからも、長野市教育委員会や信州大学と連携を取りながら、より多くの地域で取り入れられるような活動モデルを構築していけるとよいのではないかと考えている。

#### 4. まとめと今後の課題

本調査により、これまでの学習チューター学生支援授業を振り返ることができ、学習チューター活動がよりよいボランティア活動として発展していくための改善点について明確にすることができた。今回の調査によって得られた知見に基づき、大学として学生ボランティアを支援する際に有効なセンター型支援とネットワーク型支援（下川，2002）についてまとめた（表7参照）。これらの資料を参考に、センター型支援とネットワーク型支援の双方を活用しながら学生ボランティア活動を支援していく必要があるだろう。特に、ネットワーク型支援が不足している現状にあるため、次年度以降はネットワーク型支援活動の充実を目指していく予定である。

最後に、学習チューター活動が開始されて以来、小中学校現場から「できるだけ多くの学生に学習チューターとして活動してもらえると助かります」という声をきく。また、地域から大学に対して多種多様なボランティア活動依頼が数多く舞い込んでくることから、地域が学生たちの力を必要としていることがわかる。このような地域の声に応えるためにも、地域に生きる大学として、学外ボランティア活動に取り組む学生の支援体制を整え、地域と連携した体験型学習の場を広げることにより、学生の社会人としての資質向上を目指していきたいと考えている。

表6 学習チューター活動に対する意見・感想 一覧

分類	具体的記述
活動意欲の向上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・もっと早くはじめていればよかった。</li> <li>・来年度も時間の許す限り継続していきたい。</li> </ul>
体験学習の重要性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学部在籍でできることで経験できるシステムだと思うので、多くの人に教育現場の実情を体験してもらいたい。</li> <li>・心理を学ぶ場にいる学生にとっての実体験は講義を受ける時も重なる部分が多いと感じられる。</li> <li>・学習チューター支援授業で特別支援学校に行くなど、外部機関の人の話を聞く時間を多くもてるようになることを希望する。</li> <li>・やりがいのある活動だと思う。活動している学生がいきいきとしている。</li> </ul>
広報活動の必要性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長野市以外でも活動をしたい学生はもっといると思う。学生にも地域にも学習チューター活動を広く知ってもらう必要があるだろう。</li> <li>・わかりやすく学習チューター活動をもっと普段からオープンに公表すべき。</li> <li>・校内に写真や活動報告を貼るなど、学習チューター活動にたいする単純接触場面を増やすと学習チューターをやりたいと思う学生が増えると思う。</li> </ul>
活動拡大の必要性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長野市だけではなく他の地域で活動できたことは本当によかった。</li> </ul>

表7 大学における学生ボランティア支援体制案

センター型支援 (大学内にある拠点的資源の活用促進)	ネットワーク型支援 (学生同士のネットワークづくり支援)
<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ ボランティアオフィスの活用促進 (ボランティア登録など)</li> <li>➤ 活動担当教員への相談窓口設置</li> <li>➤ 年間を通した活動支援授業の設置</li> <li>➤ 学外活動Ⅰ(ボランティア)の 単位取得申請手続きに関する説明会の開催</li> <li>➤ ボランティア報告会の開催</li> <li>➤ 専門家による講演会の開催</li> <li>➤ 教職員によるメール配信</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 学生同士の情報交換の場の提供 <ul style="list-style-type: none"> <li>・学生のつどいの開催</li> <li>・ボランティア・サークルの立ち上げ支援</li> <li>・報告者だけではなく参加者全員が主役となれる 交流会や相談会の設定</li> </ul> </li> <li>➤ 活動先との交流会の開催 (活動先担当者を交えた報告会や情報交換会など)</li> <li>➤ e-Learning の活用促進</li> </ul>



引用・参考文献

- 藤岡秀樹 2010 学校心理学から見た教育相談・生徒指導—予防的・開発的視点に焦点を当てて—京都教育大学教育実践研究紀要, 第10号, 183-192.
- 姫野完治・長瀬達也・小松正武・浦野弘 2004 放課後学習チューター事業の展開過程の分析とモデル化 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要 第26号 77-87.
- 黒沢幸子・日高潤子 2005 小・中学校支援を目指した「メンタルサポートボランティア活動」のシステム構築およびリファイン・プロセス 心理臨床学会シンポジウム発表原稿 [未出版] .
- 眞榮城和美・西一夫 2008 学習チューター活動による大学生の自己成長過程と学生支援体制に関する検討 清泉女学院大学人間学部研究紀要 第5号 3-17.
- 森孝一・山田浩司 2005 特別支援教育を進めるための 学校変革マネジメント 明治図書
- 長野市教育委員会 学校教育課 2010 学習チューターに係る経過 学習チューター説明会資料.
- 作田良三 2007 「社会人としての資質能力」の向上に対するボランティア活動の効果 日本教師教育学会年報 2007 119-129.
- 佐藤晴雄 編 2005 学校支援ボランティア 特色づくりの秘けつと課題 教育出版
- 佐藤仁美 2006 新訂 家族心理学特論第15章家族とコミュニティ 横山知行・佐藤仁美 編著 放送大学大学院文化科学研究科教材 日本放送出版協会
- 下川昭夫 2002 総合地域臨床科学にむけて—地域における臨床心理学研究室の役割—東亜大学総合人間・文化学部『総合人間科学』第2巻, 第1号, 31-38.
- 若島孔文 編 2003 学校臨床ヒント集 スクール・プロブレム・バスター・マニュアル 金剛出版

付録1

授業名：発達・学校臨床の実際(授業ガイダンス時配布資料)

**目的：病院や学校などの現場において心理臨床の専門性を発揮する際に必要な実践的知識および実践力を身につける。**

＜学習の主眼＞

- ・発達障害児への支援
- ・不登校問題への取り組み
- ・ボランティアや相談業務などの体験を通じた学習

学習チューターをやる予定の人はできるだけ履修してください。また、すでに履修し終わっている人も事例検討などを行いますので、できるだけ参加してください。

＊Time Schedule＊

- 第1回 発達・学校臨床の実際とはーガイダンスー
- 第2回 場面による心理臨床的实践の違い
- 第3回 子どもの障害とはー発達障害の理解ー疾患分類基準を知る
- 第4回 発達・学校支援準備(1)ー学校という空間を理解するー
- 第5回 発達・学校支援準備(2)ー「集団守秘義務」の意識を持つー
- 第6回 発達・学校支援準備(3)ー教員との良い連携・悪い連携ー
- 第7回 発達・学校支援準備(4)ー子どもとの相談・保護者との相談ー
- 第8回 実践報告(1)ー事例検討ー
- 第9回 実践報告(2)ー事例検討ー
- 第10回 実践報告(3)ー事例検討ー
- 第11回 実践報告(4)ー事例検討ー
- 第12回 実践報告(5)ー事例検討ー
- 第13回 実践報告(6)ー事例検討ー
- 第14回 実践報告(7)ー事例検討ー
- 第15回 実践報告(8)ー事例検討ー 全体のまとめ

(受付日：2011.年2月10日)

## S U M M A R Y

The aim of this study is to consider how to support peer tutors - students who tutor other students. The subjects, 13 female college students, answered an open-ended questionnaire about their peer tutoring activities. The results show that it is important to not only offer support through centers, such as a volunteer office, but also through a network of peer tutors and specialists using different means of communication (e.g. Internet forums).

In the future, it is necessary to further improve the center-type support while establishing a network-type support system.